

## 現代インドネシアにおける預言者一族の位置づけ —アブドゥッラー・ビン・ヌーフほかの論考から—

### The Position of the Prophet's Family in Contemporary Indonesia: From the Discussions of Abdullah Bin Nuh and Others

新井 和広  
Kazuhiro ARAI

This article references three literary texts by Abdullah Bin Nuh, Abdussalam al-Hinduan, and Idrus Alwi al-Masyhur to determine the position of the Prophet's family in Indonesia. Local religious scholar Bin Nuh discusses standard themes based on al-Qur'an, hadith, and classical Islamic science texts. For instance, he defines the Prophet's family, overviews their rights and duties, and describes societal attitudes toward them. His work can be categorized as an orthodox explication of the topic that does not delve into local issues except in minor, extratextual aspects. Conversely, two local sayyids al-Hinduan and al-Masyhur tackle contemporary problems affecting the Prophet's clan. Al-Hinduan defends the clan's position as genuine descendants of the Prophet, and al-Masyhur justifies their distinctive marriage rules. The three texts reveal the differences between the ideal and the actual vis-à-vis the Prophet's family in the real world.

#### はじめに

預言者ムハンマドの子孫、または預言者一族と総称される人々はイスラーム世界全域に暮らしている。イスラーム世界の東端に位置するインドネシアも例外ではなく、多数の預言者一族が暮らしている。彼らの出自は多岐にわたり、預言者の子孫という認識を強く持っている人びともいれば、地元の聖者の子孫と認識されている人々もいる。しかし現在のインドネシアで預言者一族として目立った活動をしているのは南アラビアのハドラマウト地方起源

---

\* 本稿は JSPS 科研費 19H01317, 19H00564 による研究成果の一部である。

の人びとである。特定の出自の人びとが目立っているとすれば、預言者一族に関する言説もそのような偏りに影響されていると考えられる。本稿ではインドネシアの中でも西ジャワのボゴールで活動していた学識者、アブドゥッラー・ビン・ヌーフの論考を中心に、預言者一族に関する言説を分析する。インドネシアの預言者一族をめぐる従来の研究は、1900年代から30年代にかけて起こったアラブ・コミュニティ内の論争に注目するものが多い。本稿では逆に1980年代の終わりから現在まで、より具体的に言えば預言者一族の地位についてさしたる論争がない時期に注目し、預言者一族の定義や地位についてどのような言説が展開されているのかを分析する。

## I. インドネシアにおける預言者一族

東南アジアで特にムスリムが多いのは島嶼部で、各地に預言者一族を名乗る人々が存在する。本稿で注目するインドネシアのほか、ブルネイ・ダルサラーム国の第3代国王、シャリーフ・アリーも預言者の子孫（ハサン裔）として知られている。また過去の高名な聖者についても、信憑性はともかく預言者まで遡る血統が伝えられていることが珍しくない。しかし現在預言者一族の集団として最も多くの注目を集めているのは南アラビアのハドラマウト出身者（ハドラマミー）の子孫であろう。ハドラマウトは自然環境の厳しさ、18世紀以降の政治の不安定さなど複数の理由から域外に移民を出しており、特にインド洋沿岸各地への移民が有名である。東南アジアへの移民は18世紀以降に徐々に活性化し、20世紀中頃（正確には日本による東南アジア占領）まで続いた。ハドラマウト出身者もさまざまな社会集団で構成されており、預言者一族はその一つを占めるにすぎない。しかし預言者一族は数ある集団の中で最も血統に関する意識が強く、宗教関係の活動でも目立っている。その理由は彼らが預言者ムハンマドにつながる、換言すればイスラーム的な文脈の中では最も高貴な血統を持っていること、血統の記録を現在も保持していること、族内婚の傾向が強いことなどである。イスラーム世界全体を見ると預言者一族に対して「シャリーフ」「サイイド」「ミール」など複数の尊称が使用されているが、インドネシアにおけるハドラマウト起源の預言者一族は「サイイド」という尊称を用いている。そのため本稿でも彼らを指

す場合にはハドラマミー・サイイドという語を使用する<sup>1</sup>。一方、彼らの一族の女性には「シャリーフ」の女性形である「シャリーファ」という尊称が使用される。近年ではこれらの尊称にも変化が起こっており、ハドラマミー・サイイド、特に宗教者を「ハビープ」(原義：愛される者)と呼ぶことが多い。彼らは各地でイスラーム勉強会(マジュリス・タアリーム)やマウリド(預言者生誕を賛美する詩)読誦の会を開催し、一般信徒へのイスラーム知識の普及に努めている。

預言者一族を指す言葉として「お家の人々」と訳されるアフル・アル=バイト(Ahl al-Bayt)を使用することも多い。この語は本来的には特定の宗派と強いつながりを持つわけではない。しかし現在のインドネシアでアフル・アル=バイトはシーア派とのつながりが含意される傾向がある。たとえばインドネシアではアフル・アル=バイトと名のつく団体が複数あるが、その中で2000年に結成された「アフル・アル=バイト団体協会」(Ikatan Jamaah Ahlulbait Indonesia, IJABI)、2010年に結成された「インドネシア・アフル・アル=バイト協会」(Ahlulbait Indonesia, ABI)はいずれもシーア派の団体である。その一方、ハドラマウト起源の預言者一族を代表する団体として長い歴史を持つのが1928年に結成された「アラウィー連盟」(Rabithah Alawiyah)で、こちらはスンナ派の団体である。アフル・アル=バイトという語とシーア派が強く結びついているため預言者一族の団体=シーア派という先入観を持っている人物も多いのであろう、2013年にインドネシア・ウラマー評議会(Majelis Ulama Indonesia, MUI)の研究者チームが出版した書籍『インドネシアにおけるシーア派の逸脱を知り、警戒する』の中に、ジャカルタのシーア派団体の一つとしてアラウィー連盟がリストされた<sup>2</sup>。この問題についてはMUIが正式な謝罪文を出し、アラウィー連盟がスンナ派の団体であること、今後の版では修正を行うことを明言した<sup>3</sup>。

このように、インドネシアにおける預言者一族は宗派的な「偏見」にさら

<sup>1</sup> 彼らを示すほかの語としては「アラウィー」がありアラウィー・サイイド、またはアラウィーと呼ばれることも多い。

<sup>2</sup> Tim Penulis MUI Pusat, *Mengenal & Mewaspadai Penyimpangan Syi'ah di Indonesia*, Depok (Java): Gema Insani, [2013], 93.

<sup>3</sup> インドネシア・ウラマー協議会からアラウィー連盟への書簡。2014年3月26日付, No. U/112/MUI/III/2014。書簡の画像はアラウィー連盟のウェブサイトに掲載されている(<https://rabithahalawiyah.id/surat-permohonan-maaf-mui-kepada-rabithah-alawiyah/> 2022年7月31日閲覧)。

される可能性を持ちながら活動しているのも事実である。しかしそれは単なる偏見だとも言いきれない。近年のインドネシアではシーア派も広がりを見せ、ハドラミー・サイドの中にもシーア派に「転向」または「改宗」する人びとが現れている。たとえば東ジャワのバンギルにあるイスラーム寄宿塾、ポンドク・プサントレン・YAPI (Yayasan Pesantren Islam イスラーム・プサントレン財団) はシーア派の教育機関として知られているが、この組織を設立、運営しているのはハドラミー・サイドの有力家系、ハブシー家の人びとである。ハドラミー・サイドの中で宗派的にはシーア派の人びとも預言者一族についての書籍を出版している<sup>4</sup>。近年におけるシーア派の広がりについてはサイドであるかどうかを問わず問題になっているが、それについては改めて取り上げたい。

上述の通りインドネシアで預言者の子孫と考えられている人々はハドラミー・サイドだけではない。たとえば15～16世紀においてジャワのイスラーム化に貢献したと考えられている9人の聖者、ワリ・ソングも預言者まで遡る血統が伝えられている。だとすれば、各地に暮らしているワリ・ソングの子孫も理論的には預言者一族と見なされる。しかし筆者が見聞きする限りでは彼らは預言者の子孫というよりもワリ・ソングの子孫という認識の方が強い。そのため本稿の議論の射程に含めない。

このように血統の上でも宗派、思想信条の上でも多様であるため預言者一族論とは言っても議論が一つに収束しているわけではない。スンナ派とシーア派の預言者一族論がどの点で共通し、どの点で異なるのかなど扱うべきテーマは少なくないが、本稿ではスンナ派の学識者や預言者一族によって著された一般向けの書籍を分析の対象とする。

インドネシアの預言者一族に関する研究は三つに分類できる。最初はインドネシアのアラブ系、またはハドラミーに関する研究の中で預言者一族(ハドラミー・サイド)に焦点を当てるもので、そのほとんどが歴史研究である。その理由は1900年代から30年代にかけてサイドの特権的な地位が問題視され、サイドに批判的な人々との間で激しい議論が交わされたため、

<sup>4</sup> たとえばアリー・ウマル・ハブシーはクルアーンの部族連合章(42章)33節の解釈を、シーア派の学者の説をもとにまとめている。Ali Umar al Habsyi, *Keluarga Suci Nabi SAW: Tafsir Surah al-Ahzab Ayat 33*, Jakarta: Ilya, 2004.

近代以降のアラブ系の歴史に関する研究ではこの問題への言及を避けられないからである。アラブ・コミュニティ内における論争を取り上げた研究としては、Mobini-Kesheh, Freitag, Ho, 山口などによるものが挙げられる<sup>5</sup>。また近年のハドラーミー・サイイド（ハビーブ）の動向に関する研究としては Alatas や筆者によるものなどが挙げられるが<sup>6</sup>、いずれの研究も社会における預言者一族の地位そのものを対象とする議論ではない。第二の流れはシーア派に関する研究の中で預言者一族を取り上げるものである。このカテゴリーの中で最も重要なのは Zulkifli による先駆的な研究<sup>7</sup>であろう。ここではインドネシアのシーア派が自らの立場を正当化するために他の宗派でも認められている「アフル・アル＝バイト」という語を使用するなど、シーア派の思想戦略が議論されている。しかし預言者一族論という観点から見ると特定の宗派に偏った議論になるという問題がある。第三の流れは、預言者一族崇敬を宗派の視点を超える形で議論しようというもので、Formichi and Feener による論文集が代表的な成果である<sup>8</sup>。また Muwahidah はシーア派の学校に通っていたりシーア派の行事に参加したりすることが必ずしも本人の宗派と結びついていないことをフィールド調査から明らかにしている<sup>9</sup>。

いずれにしても、インドネシアにおける預言者一族に関する研究は特定の集団や宗派と関連づけたり、それを乗り越えたりする試みを通じて議論されてきた。しかし預言者一族への敬愛は一般信徒の生活にも関わってくる事柄であり、シーア派の浸透など大枠の話と分けて考える必要もある。また社会

---

<sup>5</sup> Natalie Mobini-Kesheh, *The Hadrami Awakening: Community and Identity in the Netherlands East Indies, 1900–1942*, Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 1999; Ulrike Freitag, *Indian Ocean Migrants and State Formation in Hadhramaut: Reforming the Homeland*, Leiden: Brill, 2003; Engseong Ho, *The Graves of Tarim: Genealogy and Mobility across the Indian Ocean*, Berkeley: University of California Press, 2006; 山口元樹『インドネシアのイスラーム改革主義運動：アラブ人コミュニティの教育活動と社会統合』慶應義塾大学出版会，2018年。

<sup>6</sup> Ismail Fajrie Alatas, “Becoming Indonesians: The Bā ‘Alawī in the Interstices of the Nation,” *Die Welt des Islams* 51 (2011): 45–74; Kazuhiro Arai, “‘Revival’ of the Hadhrami Diaspora? Networking through Religious Figures in Indonesia,” in Noel Brehony et al. (eds.), *Hadhramaut and its Diaspora: Yemeni Politics, Identity and Migration*, London: I.B. Tauris, 2017, 101–123.

<sup>7</sup> Zulkifli, *The Struggle of the Shi’is in Indonesia*, Canberra: ANU Press, 2013.

<sup>8</sup> Chiara Formichi and Michael Feener (eds.), *Shi’ism in Southeast Asia: ‘Alid Piety and Sectarian Constructions*, Oxford: Oxford University Press, 2015.

<sup>9</sup> Siti Sarah Muwahidah, “For the Love of Ahl al-Bayt: Transcending Sunni-Shi’i Sectarian Allegiance,” *Journal of Shi’a Islamic Studies* 9-3 (2016): 327–358.

の中で暮らしている預言者一族は必ずしも理想的な人格を体現しているとは限らない。日常生活の中では高貴な血筋に対する尊敬の念と目の前にいる生身の人間としての預言者一族への対応のせめぎ合いがある。それに加えて一般のムスリムは信仰に関わる事柄について必ずしも深く理解しているわけではなく、預言者一族の地位や権利、義務についても例外ではない。このような知識不足は預言者一族自身についても当てはまるだろう。本稿で預言者一族論の中でも「一般向け」に書かれた著作を取り上げるのはこのような理由である。

## II. 預言者一族の美德に関する言説—1980年代後半から現在まで—

本稿ではインドネシアにおける預言者一族論としてインドネシア語で書かれた三つの著作を取り上げる。まずインドネシアにおける預言者一族関係の出版物の中でこれらの著作が占める位置を確認する。預言者一族に関する出版物は大まかに三種類に分類され、一つは預言者一族の定義、特質、美德、権利、義務、一般信徒が預言者一族に対して取るべき態度などを論ずるもので、預言者一族論と呼べるだろう。二番目はイスラーム初期の預言者一族に関する著作で、預言者の家族（妻、息子、娘）や預言者のいとこで娘婿のアリー、ターリブ家のそのほかの人びと、アリーとファーティマの息子フサイン、ハサンとその子孫の伝記などである<sup>10</sup>。三番目は近代以降インドネシアで活動してきた預言者一族の人生や活動を紹介するもので、これはほぼハドラーミー・サイドを取り上げたもの（ほぼ全てがサイドへの賛美）だと考えてよい。本稿で取り上げる三つの著作はいずれも最初の種類に分類され、かつアラビア語等からの翻訳ではなく、インドネシア語で著されたものである。これらの著作が出版された1980年代後半から2010年代のインドネシアは大きな変化を経験した。まずスハルトの権威主義体制期から1998年のスハルト政権崩壊を経てイスラームに関する活動が自由化した。さらに2010

<sup>10</sup> たとえば As-Sayyid Hasan al-Husaini, *33 Tokoh Besar Dari Kalangan Ahlul Bait: Sisi-Sisi Keagungan Dan Kemuliaan Ahlul Bait*, Jakarta: Darus Sunnah Press, 2014 はアラビア語からの翻訳で、イスラーム初期における預言者一族（ターリブ家の人びとを含む）33人の伝記が収録されている。また後述する H. M. H. ハーミド・フサイニーもイスラーム初期の預言者一族の伝記を複数出版している。

年代からはイスラームの保守回帰傾向が顕著になり、シーア派やアフマディーヤに対する論難や場合によっては暴力が増加した。

ここで預言者一族を表す語について確認しておきたい。本稿で取り上げる著作など、インドネシア語で出版されている著作の中で預言者一族を表す言葉はさまざまあり、主なものはアフル・アル＝バイト (Ahlulbait, Ahlul Bait), 預言者一族 (Keluarga Nabi, Keluarga Rasulullah), 預言者の子孫 (Keturunan Nabi), アフル・アル＝バイトの子孫 (Keturunan Ahlulbait) である。このうちアフル・アル＝バイトについては「アフル・アル＝バイト」と書くが、原書に預言者一族、預言者の子孫、アフル・アル＝バイトの子孫と書かれている場合には預言者一族とまとめることとする。

## 1. アブドゥッラー・ビン・ヌーフと H. M. H. ハーミド・フサイニー

『預言者一族の美德』(Keutamaan Keluarga Rasulallah saw; 1987, 2001, 2014 年)<sup>11</sup>

本稿で最初に検討するのはアブドゥッラー・ビン・ヌーフ (1905～87 年) による『預言者一族の美德』である。後述するようにこの著作は 2014 年まで書名・著者名を変更しながら出版され続けており、インドネシアにおける預言者一族論の基本的文献であると言える。

著者のビン・ヌーフはジャカルタ郊外の都市ボゴールで活動した学識者で、民族的にはスダ人である。彼が生まれたのは西ジャワのチアンジュールで、幼少の時からアラビア語を学び、マッカに数年滞在した後、カイロのアズハルに留学してシャーフィイー派法学を学んだ。つまりスンナ派イスラーム世界の中心地で学び、西ジャワやボゴールなど地域レベルではよく知られている典型的なアーリムだと言える<sup>12</sup>。ビン・ヌーフ自身はアラブ系というわけではないが、ハドラミー・サイイドとの関係は深く、現在までサイイドから尊敬を受けている。たとえばムハンマド・ディヤー・シハーブと共著で、10 世紀にバスラからハドラマウトに移住したサイイド、アフマド・

<sup>11</sup> Abdullah Bin Nuh, *Keutamaan Keluarga Rasulallah saw*, Semarang: Toha Putra, 1987.

<sup>12</sup> その一方、インドネシア全体での知名度はそれほど高くないと考えられる。たとえばインドネシア・イスラームの歴史上の偉人 157 人を紹介した H. M. Bibit Suprpto, *Ensiklopedi Ulama Nusantara: Riwayat Hidup, Karya, dan Sejarah Perjuangan 157 Ulama Nusantara*, Jakarta: Gelegar Media Indonesia, 2010 にはビン・ヌーフは出てこない。



ビン・イーサー・ムハージルの伝記をアラビア語で出版している<sup>13</sup>ほか、弟子の中にはハドラーミー・サイイドの H. M. H. ハーミド・フサイニーもいる。

ビン・ヌーフが本書を執筆したきっかけは、1980年に出版したアーシューラーについての本の中でアフル・アル＝バイト、特にアリーの息子フサインの人生について解説したことである。著書は評判になり、読者からアフル・アル＝バイトについてもっと知りたいとの要望を受けたことにより当初は躊躇したものの最終的には本書の出版を決意したとのことである<sup>14</sup>。

ビン・ヌーフが当該書籍の中で取り上げた具体的な内容は以下の通りである。

「救済の船」に関する詩

預言者の高貴さに関する詩

誰が預言者一族 (Ahlulbait) か：ウラマーたちによる部族連合章 [42章] 33 節の解釈

ハディース・サカラインと預言者一族の地位

ウラマーたちのハディース・サカラインに関する意見

イブン・タイミーヤの、預言者一族に関する見解

預言者ムハンマドの家 (aal Muhammad Rasulullah) 解釈に関する四つの例

預言者一族はウンマにとっての救済である

預言者一族の美徳

預言者一族の美徳に関するハディース

アリーの優越性に関するハディース

ファーティマの美徳に関するハディース

ハサン、フサイン [の美徳に関するハディース]

「愛情の節」(Ayat Mawaddah) の議論

「外套のハディース」(Hadits “Al-Kisa”) のテキスト

創造者章 [35章] 32 節の解釈に関する物語

<sup>13</sup> Muḥammad Diyā' Shihāb and 'Abd Allāh b. Nūḥ, *al-Imām al-Muḥājir: Aḥmad b. 'Īsā b. Muḥammad b. 'Alī al-'Urayḏī b. Ja'far al-Ṣādiq*, Jidda: Dār al-Shurūq, 1980.

<sup>14</sup> Nuh, *Keutamaan Keluarga Rasulullah*, xi.



結論 [37 項目]<sup>15</sup>

上記の通り、本書でははじめに預言者一族に関連する二つの詩を紹介した後、誰が預言者一族なのかに関する議論が始まる。そこではクルアーンの部族連合章 33 節と「外套のハディース」と呼ばれているハディースに関するさまざまな学者の説が紹介される。アフル・アル＝バイトに誰が含まれるのかについての標準的な説は預言者、預言者の娘ファーティマ、預言者の従兄弟で娘婿のアリー、ファーティマとアリーの二人の息子ハサン、フサインの 5 人であろう。ビン・ヌーフはその説に加えてよく唱えられている説、つまり預言者の妻たちを含める説、ハーシム家の人々だとする説、アッバース家も含める説、預言者と一緒に暮らしていた人々（男性、女性、親族、奴隷も含める）などさまざまな説を紹介している。最後の説に関してはイブン・アラビーの『マッカ啓示』を引用しながらサルマーン・ファーリスィーもアフル・アル＝バイトだとする説も紹介している<sup>16</sup>。

次にビン・ヌーフが取り上げるのは「ハディース・サカライン」と呼ばれているハディース群とその解釈である。ハディース・サカラインは預言者が死去した後にこの世に残るものが二つあり、一つはクルアーンでもう一つは「イトラ」(‘itra) や「アフル・アル＝バイト」であると語ったとされるハディースである。議論はこれらの語の定義から始まり、アフル・アル＝バイトの地位、権利や禁止事項をめぐって過去の学識者が交わした議論を紹介している。たとえばイトラは預言者の子孫全員を意味するのか、それとも指導者だけなのか<sup>17</sup>、アフル・アル＝バイトは子孫たちも含めた概念なのか<sup>18</sup>、預言者たちの妻はアフル・アル＝バイトに含まれるのか、ザカート<sup>19</sup>を受け取ることが禁止されている人々（アリー家、アキール家、ジャアファル家、アッバース家）もアフル・アル＝バイトに含まれるのか<sup>20</sup>、アフル・アル＝

<sup>15</sup> Ibid., i.

<sup>16</sup> Ibid., 11. もっともサルマーン・ファーリスィーを「お家の人々」の中にも含むという説は特に珍しくはない。

<sup>17</sup> Ibid., 22-23.

<sup>18</sup> Ibid., 23.

<sup>19</sup> 原文ではサダカ (shadaqah) だが、これは浄財としてのザカートを意味する。

<sup>20</sup> Ibid., 21.

バイトの人々は罪を犯さないのか<sup>21</sup>、アフル・アル＝バイトがザカートを受け取れるとしたらどのような状況下においてか<sup>22</sup>、アフル・アル＝バイトが地獄に行く可能性はあるのか、等の問題についてさまざまな学識者の説が紹介されている。それ以降の議論はムスリム社会における預言者一族の卓越性など、彼らが特別な地位にあることがハディースなどをもとに論証されている。

本論の最後の章ではクルアーン創造者章 32 節の解釈に関する物語として、アッバース朝カリフ、マアムーン（在位 813～33 年）とアリー・リダー（818 年没）の会見の様子が語られている。会見にはイラクとホラーサーンの学識者たちも呼ばれた。カリフは彼らに対し当該部分の解釈を求め、両地域の学識者たちは節の最初の文章、つまり「ついでわれらは、僕の中から選びだした者に啓典を継がせよう」<sup>23</sup>の「僕の中から選びだした者」はウンマ全体を指しているという見解を出した。しかしアリー・リダーは当該箇所はウンマ全体ではなく、預言者の子孫たちを指していると言い、クルアーンのさまざまな箇所を引用しながら自説の正しさを主張した。会見の最後にカリフはアリー・リダーに対して神の祝福があるよう願った。アリー・リダーは十二イマーム派第 8 代イマームであるが、ここではアフル・アル＝バイトの中で著名な指導者として語られている<sup>24</sup>。

本書の結びでは、それまでになされた議論が 37 項目にまとめられている。それらの概要は以下の通りである<sup>25</sup>。

預言者とアフル・アル＝バイトはウンマから尊敬される権利を持っている。

アフル・アル＝バイトの高貴さは預言者を基盤にしている。

預言者はアフル・アル＝バイトとその子孫の父祖である。

ウンマは彼らから知識を得る必要がある。

彼らが好まないことは預言者も好まない。

<sup>21</sup> Ibid., 23–24.

<sup>22</sup> Ibid., 49–50.

<sup>23</sup> 藤本勝次ほか（訳）『コーランII』中央公論新社，2002，173.

<sup>24</sup> Nuh, *Keutamaan Keluarga Rasulullah*, 226–238.

<sup>25</sup> Ibid., 239–242.

彼らに害をなすことは預言者に害をなすのと同じことであり神の怒りを買う。

この世の終わりまで彼らの血統は途絶えない。

彼らを愛せなければ信仰が完成しない。

彼らに親切にすれば神からの恩寵や長寿を授かりこの世の終わりに見返りがある。

アフル・アル＝バイトは大きな権利を持っている。

預言者はムスリムに対してアフル・アル＝バイトに良くするよう言い遣した。

アフル・アル＝バイトは神から授かったさまざまなもののために嫉妬の対象になっていることを認識する必要がある。

人類は彼らと運命をともにし、彼らがよい状態にある時には人類もよい状態にあり、彼らが悪い状態にある時には人類も悪い状態にある。

本書の内容は主にスンナ派の過去の学識者の説を紹介しながら、アフル・アル＝バイトとその子孫は特別な存在なのか、アフル・アル＝バイトに含まれるのは誰なのか、預言者一族に敬意を表することは義務なのか、一般信徒は預言者一族にどのような態度を取ればよいのか等の問題に対して各論を提示する形式をとっている。ビン・ヌーフが参照している学識者やハディース集の編者は、スンナ派四法学派の名祖やハディース集の六書の編纂者のほか、スンナ派・シャーフィイー法学派に属している人物を中心に、クルアーン解釈や法学などで有名な学識者である。例を挙げるとタバリー（923年没）、ハキーム・ティルミズイー（936～38年没）、サアラビー（1035年没）、ハーキム・ナイサーブリー（1014年没）、アブー・バクル・バイハキー（1066年没）、ワーヒディー（1076年没）、ザマフシャリー（1144年没）、イブン・アティーヤ（1147年没）、イブン・アスィール（1233年没）、イブン・アラビー（1240年没）、ナワウィー（1277年没）、バイダーウィー（1286年没）、イブン・タイミーヤ（1328年没）、イブン・カイイム・ジャウズイーヤ（1350年没）、マクリーズイー（1442年没）、ビカーイー（1480-81年没）、スユーティー（1505年没）、イブン・ハジャル・ハイタミー（1567年没）などである。それに加えて近現代の思想家ではエジプトのムハンマド・アブドゥフ（1905年没）やレバノン出身のシーア派学識者、ムハンマド・ジャ

ワード・ムグニーヤ（1979年没）の見解も本書で紹介されている。逆に言えば本文は各論の紹介という色彩が強く、いくつかの論に対して同意しない旨の意見が提示されることはあるが、ビン・ヌーフ独自の意見が明示されているわけではない。

ビン・ヌーフの結論は過去の多くの学識者同様アフル・アル＝バイトやその子孫、つまり預言者一族の特別な地位を認めるものである。しかし彼の議論は無条件で預言者一族を称賛し、利益を与えることではない。本書の中でビン・ヌーフが強調しているのは、預言者一族は特別な権利を持っているが同時に一族の名に恥じないよう特別な責任を負っているという点である。そして預言者一族が常に理想的な振る舞いをしていたり、高貴な血統に見合った学識を持っていたりしたわけではないことにも暗に言及されている。たとえば上記結論のすぐ後に、以下のような記述が見られる。

全ての点を鑑みて、本書を終えるにあたってムスリムに呼びかけたいのは、アフル・アル＝バイトの子孫たちが困難に直面している時には躊躇せず援助すること、彼らの中で知識がある者からは学び、知識の深さに欠ける者には教えることである。ムスリムの平穏な生活は彼らの平穏な生活と大いに関連している。彼らはムスリムにとって救済の船であり、夜に大洋を航海する時に道標となる星々と同じである。<sup>26</sup>

またビン・ヌーフは本書の序言において預言者一族に神からもともと与えられた美徳（*fadhilah dzatiyyah*）についてほかの人々が嫉妬するようなものではなく、むしろ他人より重い義務を背負っているものと述べている。

預言者の子孫たちに神から与えられた美徳は彼らが感じている義務から切り離すことができず、その義務は一般信徒が背負う義務よりも重い。彼らはいつもウンマの中で自分たちが置かれている位置を意識しなければならない。彼らは預言者一族の高貴さを汚すような言葉、行動、姿勢から距離を置かなければならないし、イスラームやウンマのイメージについてより大きな義務を背負っていることを意識しなければならない。

---

<sup>26</sup> Ibid., 242. 翻訳、下線は筆者による。

これらの義務が果たされることによって、シャリーアによってムスリムたちに課せられている義務、つまり彼らを尊敬しなければならないという義務は最善の形で実現されるのである。預言者の子孫たちが突出してほかの人々からの尊敬を要求するような印象を持たれてはいけないし、ムスリムたちはシャリーアに定められているような位置に彼らを置かなければならない。<sup>27</sup>

このように預言者一族に対して正しい学識を持ったり美德に見合った行動をしたりするよう求める部分は本論ではなく序言や結びの後に書かれている。

それでは預言者一族への呼びかけとも考えられる部分は出版当時の社会状況を反映したものでしょうか。本論では現代インドネシアの預言者一族、つまりハドラミー・サイドへの言及はほぼ見られない。しかし H. M. H. ハーミド・フサイニーが本書の巻頭に書いた「挨拶文」(Kata Sambutan)<sup>28</sup>ではアラウィー（ハドラミー・サイド）を代表してビン・ヌーフが本書を執筆したことに感謝すると同時に、一部のハドラミー・サイドが起こした問題を憂慮する記述が見られる。フサイニーは以下のように述べている。

この挨拶文の最後に、西ジャワ、中部ジャワ、東ジャワで起こった事件に懸念を表明しておく。そのニュースによると、学識もなく宗教教育を十分に受けていないアラウィーの若者たちがアフル・アル＝バイトの子孫であるという血統を乱用して何らかの利益を得ようとしている。彼らはアフル・アル＝バイトを愛する人びとのところに行き、彼らの起源を「プロモーション」すると言ってあれこれ要求する。そして時にはそういった人びとに圧力をかけることも躊躇しない。[中略] そのような出来事はアラウィーの尊厳を傷つける「災害」である。[中略] いずれにしてもこのような行いはアフル・アル＝バイトを好ましく思っていない人びとやイスラームを好ましく思っていない人びとがいろいろ騒ぎ立て

---

<sup>27</sup> Ibid., xiii.

<sup>28</sup> インドネシアで出版される書籍の場合、分野の専門家や著名人が紹介文や挨拶文を巻頭に載せるのは珍しくない。

る理由を与えることになる。それどころかアフル・アル＝バイトの子孫だと詐称して利益を得ようとする人びとに真似される可能性もある。彼らの中で過ちを犯した者を反省させ、神と預言者に喜ばれる道に戻すのはムスリム・コミュニティ全体の義務である。<sup>29</sup>

このように、預言者一族の美德について議論する書籍であっても一部のサイイドが血統に見合った学識や倫理観を持たず、好ましからざる行いをしてることを批判している。それではフサイニーはどのような立場の人物だろうか。

フサイニーはアブドゥッラー・ビン・ヌーフの弟子の一人である。自らは東ジャワのトゥバンで生まれたハドラミー・サイイドで、家系ではハーミド家に属している<sup>30</sup>。インドネシア生まれのハドラミー・サイイドもある時期まではアラビア語やイスラーム諸学を学ぶ際にハドラマウトに行くことが多かったが、フサイニー自身もワーディー・ハドラマウトのイーナート村、つまりハーミド家の中心で学んでいる<sup>31</sup>。つまり彼はハドラミー・サイイドの伝統的な方法で宗教教育を受けてきたと言える。フサイニーもビン・ヌーフ同様複数の著作を世に送り出してきたが、預言者、ファーティマ、フサイン、アリー、ザイヌルアービディーンなど「お家の人々」とその子孫に関するものが目立っている。ハドラミー・サイイドでは17～18世紀の学識者・スーフイーのアブドゥッラー・ビン・アラウィー・ハッダード（1720年没）に関する著作があるほか、学者の中で意見が分かれる事柄（ヒラーフィーヤ *khilāfiyya*）に関する著作の中では東南アジアのイスラーム化の歴史をサイイドの役割を強調して記述したり「反サイイド」の人びとからの非難に反論したりしている<sup>32</sup>。このようにハドラミー・サイイドの立場を擁護する立場を

<sup>29</sup> Ibid., vi–ix. 翻訳、下線は著者による。

<sup>30</sup> フサイニーの経歴は H. M. H. al-Hamid al-Husaini, *Keagungan Rasulullah SAW & Keutamaan Ahlul Bait*, Bandung: Pustaka Hidayah, 2001, 9–10 参照。

<sup>31</sup> イーナートはシャイフ・アブー・バクル・ビン・サーリム家の中心として知られているが、ハーミド家はこの家系の分家である。

<sup>32</sup> H. M. H. al-Hamid al-Husaini, *Pembaru abad ke 17: Al-Imam Habib Abdullah Bin Alwi Al-Haddad: Riwayat, Pemikiran, Nasihat dan Tarekatnya*, Bandung: Pustaka Hidayah, 1999; H. M. H. al-Hamid al-Husaini, *Pembahasan Tuntas Perihal Khilafiyah*, Bandung: Pustaka Hidayah, 1996. フサイニーによるサイイド擁護の論については稿を改めて取り上げたい。

取る傾向はあるが、ビン・ヌーフの著作の挨拶文ではサイドについて自省的な態度で記述している。

本書のもう一つの特徴は出版することによって社会の中で議論が起こるのを避ける姿勢である。たとえば上述のハディース・サカラインとされているハディースの中には預言者が死去した後この世に残されるものとしてクルアーンと（預言者一族ではなく）スンナの二つが挙げられているものもある。ビン・ヌーフはそのようなハディースの存在は認めつつもそれはハディース・サカラインとは別のハディースであるとして、残されるものうち二番目のものは預言者の子孫なのか、それともスンナなのかという議論は避けている<sup>33</sup>。またアフル・アル＝バイトを愛することはシーア派の教義と同じではないかという疑問に対してはフサイニーが答えている。彼によればアフル・アル＝バイトへの愛は預言者自身、クルアーン、教友、ハディースの徒、全ての（スンナ派）法学派の最上の学識者たちが述べていることからスンナ派で広く受け入れられていると主張している<sup>34</sup>。つまりアフル・アル＝バイトへの敬愛はスンナ派、シーア派を問わず宗派を超えて認められる点を強調している。ビン・ヌーフの著作の初版は1987年に出版されている。当時のインドネシアは権威主義体制をとるスハルト政権下であり、1979年のイラン革命の影響がインドネシアに及ぶことが懸念されてきた可能性もある。

いずれにしても、ビン・ヌーフ自身は本書で提示されている説は自分の意見ではないこと、本書を再版する場合には自分の名前で出版しないことを求めている。実際、本書は2001年に再版されているが、その時の名義はフサイニーで、書名も『預言者の偉大さとお家の人びとの美德』(*Keagungan Rasulullah SAW & Keutamaan Ahlul Bait*)に変更されている<sup>35</sup>。2014年に出版された第3版では著者はビン・ヌーフに戻されたが書名は『預言者一族を愛する：天国に向かうための携行品』(*Mencintai Keluarga Nabi Saw: Bekal Menuju Surga*)に再変更されている<sup>36</sup>。このように何度も再版されている理由は二つあるだろう。一つはビン・ヌーフの学識者・著述家としての実力や評判で、

<sup>33</sup> Nuh, *Keutamaan Keluarga Rasulullah*, xi-xii.

<sup>34</sup> *Ibid.*, v.

<sup>35</sup> Al-Husaini, *Keagungan Rasulullah SAW*.

<sup>36</sup> Abdullah Bin Nuh, *Mencintai Keluarga Nabi Saw: Bekal Menuju Surga*, Jakarta: Noura Books, 2014.



マッカやアズハルのようなスンナ派ムスリムの教育の中心地で学び、アラビア語が堪能なことが挙げられる。二番目の理由は本書がイスラーム諸学の古典における議論を忠実におさえ、自分の見解を示すことに自制的な態度をとっているため、ほかの人々が預言者一族について議論する際の参照先となり得るためであると考えられる。

## 2. アブドゥッサラーム・ヒンドゥアーン (Sayyid Abdussalam al-Hinduan)

『預言者は子孫を持ち神は彼らを高貴な者とする』(*Rasulullah SAW. Mempunyai Keturunan & Allah SWT Memuliakannya*; 2008年)<sup>37</sup>

二番目に取り上げる著作はアブドゥッサラーム・ヒンドゥアーンによる『預言者は子孫を持ち神は彼らを高貴な者とする』である。著者は家名から分かる通りハドラミー・サイイドのヒンドゥアーン家の一員で、西カリマンタンのポンティアナック出身である。大学の学部では農学を専攻したが宗教活動も活発に行っており、本書の前書きではカーデイリーヤ・ナクシュバンディーヤ・タリーカの世話人という肩書を使用している。また現在はスマトラ島中部のジャンビでイスラーム勉強会 (Majelis Liwa'ul Musthofa Petaling Jaya) を開いている<sup>38</sup>。ヒンドゥアーン自身はイスラーム諸学を専門的に学んだわけではない。しかし東南アジア在住のハドラミー・サイイドは専門家や実業家として仕事を行う傍ら地元でイスラーム教育を行ったり宗教行事を主催したりすることが多く、彼もそのような典型的なサイイドの宗教者の一人と言える。

本書執筆のきっかけになったのは、当地のダーイー（イスラームへの呼びかけを行う者）たちが預言者一族、または預言者の子孫について以下の主張をしているのを直接・間接的に耳にしたことである。

- ・すべての人間はアダムの子孫、バヌー・アダムである。
- ・預言者ムハンマドには子孫がない。なぜなら全ての男子は幼少の時に亡くなり、女子しかいなかったからである。

<sup>37</sup> Sayyid Abdussalam Alwi al-Hinduan, *Rasulullah SAW. Mempunyai Keturunan & Allah SWT Memuliakannya*, n.p.: Cahaya Hati, 2008.

<sup>38</sup> このマジュリスについてはフェイスブックのページ (<https://www.facebook.com/MLM.Jambi.Petaling> 2022年8月24日閲覧) 参照のこと。

- ・たとえ預言者に子孫がいたとしてもハサンとフサインまでで、ハサンはマディーナで毒殺され、フサインはカルバラで（ムハッラム 10 日に）殺害されたことを思い出せば、子孫はそこで断絶したと考えられる。
- ・またほかの者が言うには、たとえ預言者に子孫がいたとしてもジャアファル・サーディクまでである。
- ・預言者の子孫と預言者の子孫でない者との間に違いはない。なぜなら全ての人間はアードムの子孫であり、高貴な者は信心深い者だからである。<sup>39</sup>

ダーイーたちによるこれらの言葉に対して、本書では以下の 10 の項目を立てて預言者一族が現在も存在することや特別な地位を得ていることを主張している。

1. 男子が亡くなったことで子孫がいなくなり、預言者がクライシュ族のカーフィル [不信仰者] に馬鹿にされた時、豊饒章が下された。
  2. 部族連合章 33 節が下され、お家の人々が揺るぎないものとなった。
  3. アードムと預言者の全ての子孫は父系である。預言者ムハンマドの子孫はアリーとファーティマの椎骨からである。
  4. ハディース・サカライン、クルアーン、預言者ムハンマドの子孫たち及び子孫たちの地位。
  5. 預言者ムハンマドの子孫はこの世の終わりまで存在する。
  6. 神は我々に、預言者一族を愛するよう義務づけた。
  7. イマーム・ハサンとイマーム・フサインの最期の詳細。
  8. バヌー・アラウィーの意味と祖先。
  9. 称号の出現：イマーム、シャイフ、サイイド／シャリーフ及びハビーブ。
  10. イスラーム拡大における預言者の子孫の役割。
- 巻末：アラウィー連盟からの推薦文、血統・知識の伝達経路の図（アラ

<sup>39</sup> Al-Hinduan, *Rasulullah SAW. Mempunyai Keturunan*, 13-14.

ウイー、カーディリー・ナクシュバンディー、ジャワの聖者)。<sup>40</sup>

ダーイーたちによる上記の見解に対する反論、そして預言者一族の地位に関する議論はビン・ヌーフ同様クルアーン、ハディース、そして過去の学識者の説に基づいている。引用する学識者もビン・ヌーフと特に変わらず、スンナ派の名だたる学識者たちである。結果としてアフル・アル＝バイトの範疇やハディース・サカライン中の「イトラ」の解釈ではビン・ヌーフの著作で目にした説が紹介されている。

それでは本書の特徴は何だろうか。一つは執筆の動機が一部のダーイーたちに反論することだったため、論争的な性格を持っているという点にある。ビン・ヌーフの著作の半分程度の分量しかない本書では、さまざまな説を取り上げるよりは預言者の子孫が現在まで存在していること、彼らが特別な地位にあることが強調されている。そのため議論も単純化されている。たとえばビン・ヌーフがアフル・アル＝バイトの範疇で複数の説を併記するのにとどまったのに対し、アル＝ヒンドゥアーンは預言者の妻を含むという説に異論を唱えながら、アフル・アル＝バイトに含まれるのは5人（預言者、ファーティマ、アリー、ハサン、フサイン）であるという結論を下している<sup>41</sup>。もう一つの特徴はハドラミー・サイイドの地位や歴史に強く結びつけて議論が展開されていることである。たとえば上記8～10、つまりアラウィー族（ハドラミー・サイイド）の歴史、預言者一族の称号、イスラーム拡大と預言者一族の役割に関する議論でもイスラーム初期を除くとハドラミー・サイイドの歴史、つまりハドラマウトにおける預言者一族の称号の変遷、彼らによるインド洋沿岸地域への移民、ハドラミー・サイイドによる布教の結果島嶼部住民の大多数がムスリムになったことなどが語られている。東南アジアのイスラーム化の経緯は複雑で、さまざまな文化的背景を持つ地域のイスラーム化を、特定の地域からやってきた特定の集団に帰することはできない。しかしハドラミー・サイイドの中には東南アジアのイスラーム化がハドラマウトからやってきた自らの祖先によって達成されたとする歴史観を強く持つ人々も存在し、実際に宗教者たちはそのように宣伝している。自

<sup>40</sup> Ibid., 17–18. 翻訳、下線は筆者による。

<sup>41</sup> Nuh, *Keutamaan Keluarga Rasulullah*, 12–13; al-Hinduan, *Rasulullah SAW. Mempunyai Keturunan*, 31.

らも預言者一族、さらにハドラミー・サイイドの一員であるヒンドゥアーンにとっては単に預言者につながる血筋が特別なものであることを古典を基に論証するだけでは不十分で、自分が居住している場所のイスラーム化にも偉大な貢献を果たしたことが語られる必要があったと考えられる。

本書の最後の部分ではイスラームの拡大と関連させてカーディリーヤ、シャーズィリーヤ、ナクシュバンディーヤなどイスラーム世界全域に広がっているタリーカと併置する形で、ハドラミー・サイイドのタリーカであるアラウィーヤの概要が語られている。ハドラミー・サイイドのあり方にとってタリーカ・アラウィーヤは極めて重要であるが、後述するマシュフルの著作では触れられていない。タリーカと預言者一族について述べているのはヒンドゥアーンが世話役としてタリーカの活動と密接に関わっているためであろう。

本書には結論にあたる部分が存在しない。巻頭で著者が挙げた問題は本文の中で適宜反論が加えられている。本稿ではヒンドゥアーンの著作を「預言者一族論」の一つとして取り上げたが、実際には預言者一族の範囲、彼らの特別な地位や権利・義務などをクルアーン、ハディース、そのほかの古典を引用する形で紹介し、さらにインドネシアにいる預言者一族の歴史の概略を述べる著作となっている。現在のインドネシア在住サイイドの一人として書いていることは確かだが、後述するマシュフルのようにサイイドの結婚規定などに関して議論を呼ぶような論を展開することもない。このように論として際立った特徴があるとは言えないが、一つ言えるのは本書がインドネシア在住ハドラミー・サイイドの「公的」な見解を代表していることである。これは本書の巻末にジャカルタのアラウィー連盟からの推薦文が掲載されていることから分かる。

### 3. アイダールス・アラウィー・マシュフル (Idrus Alwi al-Masyhur)

『預言者一族の美德と高貴さ』(*Keutamaan & Kemuliaan Keluarga Rasulullah SAW*; 2012年)<sup>42</sup>

三番目に取り上げるのはアイダールス・ビン・アラウィー・マシュフルによる『預言者一族の美德と高貴さ』である。著者のマシュフルの教育や経歴の詳細は明らかではないが、アラウィー連盟の一部局としてハドラーミー・サイイドの血統を記録している「マクタブ・ダーイミー」(al-Maktab al-Daimi 永遠の事務所)に勤務していたことは本書の序文に書かれている。著者は本書のほかにもマクタブ・ダーイミーから提供された情報をもとにハドラーミー・サイイドの歴史に関する著作を発表しており<sup>43</sup>、血統に関する実務家・在野の歴史研究者と位置づけられるだろう。本書を執筆した理由は以下の通りである。著者がマクタブ・ダーイミーに勤務していた時、同事務所所長のアフマド・ビン・ムハンマド・アッタース (Ahmad bin Muhammad Alatas) と東南アジア各地のアラウィーのデータをまとめていた。その時預言者一族に関するさまざまな疑問が出てきた。また東南アジアの各地に住んでいるハドラーミー・サイイドたちも自らのアイデンティティに興味を持っている。そのため現在サイイドはどこにいるのか、彼らの権利と義務は何か、預言者一族がザカートを受け取ることはできるのか、預言者一族が結婚する時の釣り合い (カファア) には何が含まれるか、母方の預言者の子孫の地位や称号は何かなどについて情報をまとめることにした。

本書の章立ては以下の通りである<sup>44</sup>。

- ・ 預言者一族の優越性と高貴さ
- ・ 預言者一族によるザカートの受け取り禁止
- ・ サイイドとシャリーファの結婚における釣り合い (カファア)
- ・ 母方だけが預言者一族の場合の称号と地位

<sup>42</sup> Idrus Alwi al-Masyhur, *Keutamaan & Kemuliaan Keluarga Rasulullah SAW*, Jakarta: Saraz Publishing, 2012.

<sup>43</sup> Idrus Alwi al-Masyhur, *Sejarah, Silsilah & Gelar Keturunan Nabi Muhammad SAW di Indonesia, Singapura, Malaysia, Timur Tengah, India dan Afrika*, Jakarta: Saraz Publishing, 2002.

<sup>44</sup> Al-Masyhur, *Keutamaan & Kemuliaan*, v-vi.

前述二つの著作同様、本書も預言者一族の特別な地位やザカートの受け取り禁止など、基本的な情報がクルアーンやハディースを引用する形で述べられている。その一方、本書の最も大きな特徴となっているのは全体の4割程度の紙幅を割いて結婚における釣り合い（カファーア *kafā'a*）が議論されている点である。具体的な内容は、ハディースに見られるアラブの血筋の優位性、カファーアとは何か、シャリーファのカファーアの議論の根拠、ザイナブとザイドの婚姻、カファーアの要件に血統を含めることはジャーヒリーヤ時代の高慢さから来るものか、などである。カファーアにこだわる理由は著者のマシュフルが血統の記録を管理する仕事をしていたためであろう。また東南アジア各地でサイドが血統に関する意識が不足したまま結婚している状況を問題視していることも読み取れる。たとえば彼は全ムスリムに対して以下のように呼びかけている。

それに加え、預言者の子孫の権利も知らず、血統が預言者となつながらない男性がシャリーファと結婚した場合、その人物は偽善者（munafik）で、汚れた（tidak suci）行いの結果生まれた者、つまり母が生理中に妊娠した者、またはハラーム〔な行いの結果生まれた〕子供と指摘するハディースも存在する。〔中略〕ムスリム全員に対して言う。自分に釣り合っていないシャリーファと結婚することを通じてわざと預言者の子孫の権利を侵し、預言者や預言者の子孫とのつながりを断ち、預言者の言葉を冒瀆するような人びとにならないよう、預言者の子孫たちの権利を守ろう。<sup>45</sup>

このように、シャリーファと結婚した男性を偽善者や汚れた者と言うハディースを引用するなど非常に強い言葉でハドラーミー・サイドの婚姻「規定」を擁護している。

マシュフルの問題意識は賛否両論あれど多くのサイドに共有されるだろうし、実際この問題は長い歴史を持っている。ここでは1900年代から1930年代までインドネシア、または東南アジアのアラブ（≡ハドラーミー）・コミュニティを二分した論争を振り返ってみたい。論争の始まりは

<sup>45</sup> Ibid., 171. 翻訳、カッコ [ ] 内の付け足し、下線は筆者による。

シャリーファと非サイドの男性との結婚が合法かどうかという法的な議論だった。具体的には1905年にシャリーファとインド系ムスリムが結婚したが、預言者の子孫であるとされる夫の血統をハドラミー・サイド側が疑い、結婚の正当性をめぐる議論となった。これは仮定にもとづいた知的な議論というレベルではなく、実際に取り交わされた婚姻の契約が有効なのかという、ムスリムの家庭生活、ひいては社会に影響を及ぼす問題であった。議論の骨子はカファーアの要件に血統を含めるかどうか、そして預言者一族の血統は特別扱いされるべきなのかである。この問題に対して東南アジア在住ハドラミー・サイドの法学者、ウマル・アッタースが婚姻を無効とする見解（ファトワー）を出したが、カイロの改革派雑誌『マナール』では婚姻を合法とする見解を誌上で発表した<sup>46</sup>。『マナール』の主筆ムハンマド・ラシード・リダーは自身もシリア出身のサイドであるが、当時の改革派の主張ではシャリーファの配偶者を血統をもとに制限するのは正しくないという判断を下したことになる。これに対してハドラミー・サイドの側が反論するなどカファーアに関する議論は継続した。アラブ・コミュニティ内の論争は婚姻以外の問題も含んでいた。たとえばサイドに挨拶する時に尊敬のしるしとして手の甲に口づけすること（タクビール taqbil）は義務か、「サイド」という称号を使用できるのは預言者一族に限られるのかなどの論点を中心にサイドと非サイドの間で論争が続き、1930年代には暴力的な衝突も起こったがその後さまざまな理由で終息を迎えた。現在ではサイド対非サイドの表立った対立は見られないが、筆者が長年聞き取り調査を行った印象では両者の間には未だ何らかの距離感が残っている。血統のカファーアの問題も続いており、イスラーム法的に合法かどうかという点を除いてもシャリーファとサイド以外の男性の結婚を避ける傾向は現在でも見られる。

さて、マシュフルの著作で示されているカファーアの考え方はハドラミー・サイドの伝統的、または保守的な考え方を色濃く反映したものである。一方、このような結婚の制限を問題視する人々もサイドやシャリーファも含めて多数存在する。本書の巻末付近でなされている議論は現在にお

<sup>46</sup> この事件は上述の通り東南アジアのアラブ移民の歴史を論じた研究書ではたびたび取り上げられるが、日本語でこの件に触れた研究としては、山口『インドネシアのイスラーム改革主義運動』78-80がある。



けるシャリーファやサイドの考え方に対する回答に割かれている。それによるとマシュフルのもとには電子メールで抗議が寄せられたり議論を持ちかけられたりしている。それらはサイドがどの女性とも自由に結婚できるのにシャリーファはサイドとしか結婚できないのは公正 (adil) でないこと、現在のサイドからは「サイド性」(ke-sayyid-an) が失われかけているといった指摘である。それに対してマシュフルは以下のように回答する。確かにサイドにとってシャリーファでない女性の方が、シャリーファにとって非サイドの男性の方が、恋人として魅力的に映ることもあるだろうと想像する。その一方公正さを理由に伝統的な結婚規定を擁護するサイドがいるのも確かである。彼らによれば預言者の血統は男系なのでサイドの息子は母親が誰であってもサイドであるが、シャリーファが非サイドと結婚した場合には息子がサイドでなくなってしまい、この点が公正でないのである<sup>47</sup>。

著者はさらに議論を進め、サイドもシャリーファを結婚相手に選ぶべきだと三つの理由を挙げて主張する。最初の理由はサイドがシャリーファ以外の女性と結婚するとシャリーファの結婚相手がいなくなること、つまりシャリーファが結婚規定の犠牲になることである。二番目の理由は預言者が同じ血統間、つまり血統のカファアが満たされている結婚相手を選ぶべきだと述べたというハディースが存在することである。最後の理由はサイドとシャリーファ以外の女性との間に生まれた男子は血統の上ではサイドであるが、母親側の血統が生まれてくる子供の性質に影響を与えるからである。ここでマシュフルが証拠として提示している例は、ラクダの戦いにおけるムハンマド・ハナフィーヤがとった勇敢さに欠ける行動について、父であるアリーが「お前は母親の性質を受け継いだ」と言ったことである。父親であるアリーが勇敢だったことはよく知られているし、ムハンマド・ハナフィーヤの異母兄弟であるフサインやハサンが勇敢だった理由は母であるファーティマ（預言者の娘）の血が影響していたからであると言っている。事実、ファーティマの娘ザイナブもカルバラでその性質を見せたと著者は述べている。さらにマシュフルは近代以降の遺伝に関する科学的知見、つまり染色体を介して特定の性質が受け継がれることなども母方の血筋が重要

---

<sup>47</sup> Al-Masyhur, *Keutamaan & Kemuliaan*, 183.

であることを示していると主張しているが、その知識は中等教育のレベルを出るものではない<sup>48</sup>。

このように、マシュフルの議論はサイドの配偶者の血統も制限するものである。これはこの著者だけに見られる極端な議論というわけではない。現在のインドネシアのサイドの中にも、サイドはシャリーファ以外と結婚すべきでないと考え、さらにそれを実践している人々も存在している<sup>49</sup>。また歴史的にもサイドの結婚相手を一族の女性に限るという意見は存在する<sup>50</sup>。しかしそれらの理由は上記の一つ目、つまりシャリーファの結婚の機会を守るためである。マシュフルの議論はそれに加え、シャリーファでない母が子供に与える負の影響に言及していることなどが新しいと言える。いずれにしても著者の問題意識とその解決方法は明確で、かつ現代では相当議論を呼ぶ性質のものであることは間違いないだろう。

このようにマシュフルは強い言葉を使ってサイド・シャリーファの間の結婚を求めているが、実際に結ばれた婚姻関係を非難することは避けている。本書の最後は預言者一族に対する敬称に関する議論に充てられている。まずサイドという称号を使用できるのはハサンとフサイン、つまり預言者の孫の子孫だけであること、ハドラミー・サイドの称号はサイド、シャリーフ、ハビーブなどがあり時代によって変化してきたことが語られる。次に各地で母方が預言者一族（シャリーファ）で父方がサイドでない人々に使用する敬称が紹介される。たとえばマレーシアのクランタンでは *Nik* が、トレンガヌとパハンでは *Wan* が、ペラでは *Megat* が使用されている。またイラン、パキスタン、アフガニスタンでは同様の人々が使う称号として *Mirza*, *Mir*, *Mirgani*, *Aga* が言及されている。ここでは母方だけが預言者一族という、著者にしてみれば問題がある家系に言及しているわけだが、そういった家系の存在に関して価値判断は下されておらず、称号と使用されている地域だけが簡潔に紹介されている<sup>51</sup>。本書で示した規範と異なる存在に対

<sup>48</sup> *Ibid.*, 184–187.

<sup>49</sup> 聞き取り、アリー・バハル、2019年7月9日、神奈川県横浜市。アリー氏自身もサイドである師からそのように教えられてきたという。

<sup>50</sup> 森本一夫「サイド系譜学の成立（10, 11世紀）：系譜統制との関わりを中心に」『史学雑誌』105-7（1996）：588.

<sup>51</sup> Al-Masyhur, *Keutamaan & Kemuliaan*, 205.

して価値判断を示さない理由として考えられるのは、実際に称号を使用している人々に対する個人的な攻撃になるのを避けること、そしてこのような称号を使用している人々は多くの場合地域の有力者であることなどであろう。シャリーファと非サイドの男性の結婚は現実に行われており、今後起こることはともかくすでに存在している状況については沈黙を保っていると言えるだろう。

本書もヒンドゥアーンの著作同様結論にあたる部分は存在しない。本文の最後にはサイドの血統を守り、記録することが重要であること、各地にサイドの血統を記録する団体があること、インドネシアにおいてサイドの血統の正しさを証明する権威を持っているのはアラウィー連盟のマクタブ・ダーイミーであることが宣言されている。

### III. 各論の共通点や特徴

本稿で取り上げた三つの著作はいずれも預言者一族の定義や社会の中での地位、権利や義務について議論しているため、「預言者一族論」に分類できるだろう。フサイニーも含めた著者4名のうちハドラミー・サイドが3名を占めているため著作の中で現在の預言者一族へ言及している箇所は主にハドラミー・サイドの問題に関連している。また全ての著作の著者に共通して見られる問題意識はこういったテーマに関するインドネシア在住ムスリムの知識不足である。この問題は一般信徒だけに限られるものではなく、宗教者、ダーイーや預言者一族自身も含んでいる。このように3冊とも啓蒙的な性格を持ち、預言者一族の地位に関する標準的な知識を提供している点は共通する。

その一方ビン・ヌーフの著作とそのほかでは質的には大きな隔りがある。三つの著作の中で論として結論を提示しているのはビン・ヌーフのものだけである。ヒンドゥアーンとマシュフルの著作は結論にあたる部分が存在せず、それぞれの「専門」に引きつけた記述で筆を置いている。またビン・ヌーフ自身は個人的な意見を極力排除し、論争を避けていることは既に指摘した通りであるが、ヒンドゥアーンとマシュフルはそれぞれハドラミー・サイドが東南アジアのイスラーム化で果たした役割、サイドの結婚規定について持論（これはサイドの伝統的な歴史観・価値観を代表する

ものではあるが)を展開している。

このように結論を前もって決める形で議論するため、ヒンドゥアーンとマシュフルの著書では恣意的に切り取られた形で引用を行う例も見られる。たとえばフサイニーはビン・ヌーフの著作への挨拶文中でサウジアラビアのムフティー、アブドゥルアズィーズ・ビン・アブドゥッラー・ビン・バーズが雑誌『マディーナ』5692号(1982年10月24日)に発表した信徒からの質問と回答を紹介している。質問の内容は以下の通りである。質問者の友人(または兄弟)はイラクに住んでいるが、イラクの住民の中には「サイド」または預言者の子孫とされる人びとがいるという。そして病人に対して祈禱を捧げたり書き物を渡したりすることで料金を徴収している。また彼らは金銭、家畜の肉、その他の形でサダカを受け取っている。彼らが行っている行為は不適切であると確信しているが実際はどうか。

それに対するビン・バーズの回答は以下の通りである。彼らのような人びとはさまざまな国に住んでおり、「シャリーフ」という称号でも知られている。彼らはアフル・アル＝バイトの子孫たちである。彼らの血統はハサンから始まるものもあれば、フサインから始まるものもある。このような事実はイエメンでも、ほかの国でも一般的に知られている。彼らは神を恐れ、神に禁じられたことを行わないよう気をつける義務がある。彼らの高貴な血統には敬意を持つ必要があるが、それを悪用してはならない。彼らがバイト・アル＝マール(国庫)から何かを受け取るのは神によって定められた彼らの権利である。またザカートでなければ彼らがハラールなものを受け取ることも問題ではない。しかし彼らが他の人々に対し、彼らに何かを与えることを強要できると考えるのは高貴な血統を悪用していることになる。そのような行いは適切でない。預言者の子孫は(数々の人びとの)子孫の中で最も高貴であり、ハーシム家はアラブの中で最上(の家系)である。そうであるから行動でも言葉でも彼らの尊厳を損なうようなことをするのは適切ではない。いっぽう彼らを尊敬すること、彼らの美德を認めること、彼らの権利とされているものを与えること、宗教関連以外の過ちを許したりことさら問題視したりしないこと、必要な時に彼らに援助を与えることなどは美德とされる<sup>52</sup>。

---

<sup>52</sup> Nuh, *Keutamaan Keluarga Rasulullah*, vii–viii.

この記事の引用でフサイニーが意図しているのは、社会の中におけるアフル・アル＝バイトの子孫の立場をムスリム、さらに当事者自身が理解し、預言者の美德を守る義務を持っていることを再認識させることである。つまりフサイニー自身の自省の念も込めた、サイイドたちに対する警告だと言える。

ビン・バーズの記事はその後複数のサイイドの著作に引用されているようであるが、引用の方法と記事が意味するところは変化している。ヒンドゥアーンもビン・バーズが書いた同じ記事を別のサイイドの著作から孫引きの形で引用しているが、フサイニーが引用したものよりも質問、回答ともに省略、改変されている<sup>53</sup>。たとえば読者からビン・バーズに対する質問は、イラクの集団で「サイイド」または預言者の子孫を名乗っている人びと（の主張）は本当なのかという形になっており、「サイイド」の不適切だと思われる行為には触れていない。これに対する回答の部分でもアフル・アル＝バイトの不適切な行いに関する部分は省略され、アフル・アル＝バイトの子孫と言われる人びとが各国にいること、ハサンとフサインの子孫であること、サイイドやシャリーフという称号で呼ばれていること、イエメンその他の地域ではその事実は広く知られていること、彼らを尊敬し、彼らの権利とされるものを与えることなどは善い行いであることなどが述べられているだけである。ヒンドゥアーンがこの質問と回答を引用した理由は、預言者の子孫が現在も存在することを主張し、巻頭で一部のダーイーたちが言っていることに反論することである。この改変がヒンドゥアーン本人によるものなのか、それとも引用元の著者によるものなのかははっきりしない。しかしサイイドの著作がしばしば相互引用を繰り返していることから考えて、ビン・バーズの記事も今後はサイイドの不適切な行いを無視する形で「流通」する可能性がある。

自分の主張に引きつけて原文を引用するのはマシュフルにも見られる特徴である。ビン・ヌーフはアフル・アル＝バイトの範疇についてのさまざまな説に言及する際、イブン・アラビーの『マッカ啓示』を以下のような形で

<sup>53</sup> Al-Hinduan, *Rasulullah SAW. Mempunyai Keturunan*, 121-122. ヒンドゥアーンの引用元は Achmad Zein Alkaf, *Sayyidaa Syaabaab Ahlil Jannah Al Hasan RA & Al Husin RA*, [Jakarta]: Pustaka Albayyinat, 2007.

引用している。

イブン・アラビーは著書『マッカ啓示』の第29章で、とりわけ次のように述べている。「神の僕である預言者はアフル・アル＝バイトとともに可能な限り神に清められたため、すべての汚れ (rijsa) が彼らの個人的性質から取り除かれた。『rijsa』という語が意味するのは、アラブ社会で通常見られるように、彼らを悪くする可能性のあるものである。したがって、真に神に清められた者を除いて、他の者をアフル・アル＝バイトに加えることはできない。なぜなら、『アフル・アル＝バイト』の定義に含めることができるのは、彼ら [アフル・アル＝バイト] のような人だけだからである。彼ら自身は他の人を自分たちの輪の中に入れることはない。預言者自身が清浄とみなした人々以外には。その点で、サルマーン・ファーリスィーは預言者によって次のように言及されている『サルマーンは我々アフル・アル＝バイトの一員である！』<sup>54</sup>

つまり、ここでイブン・アラビーが意図しているのは、預言者に清浄とみなされることによって預言者とは血縁関係もなければアラブでもないサルマーン・ファーリスィーもアフル・アル＝バイトに含まれる可能性を示すことである。

一方、マシュフルは『マッカ啓示』の同じ部分を引用しているが、引用範囲は以下の通り異なっている。

イブン・アラビーは著書『マッカ啓示』の29章で預言者ムハンマドの偉大さについて論じており、彼と彼の家族は可能な限り清められ、汚れ (al-rijs), つまり彼らの崇高さを損なう可能性があるもの全てが取り除かれたとする見解を述べている。<sup>55</sup>

つまりマシュフルはアフル・アル＝バイトの「清浄性」だけを強調し、預言者とは血のつながりがない者も預言者によってアフル・アル＝バイトに

<sup>54</sup> Nuh, *Keutamaan Keluarga Rasulullah*, 11. 翻訳、下線は筆者による。

<sup>55</sup> Al-Masyhur, *Keutamaan & Kemuliaan*, 52.

加えられた可能性があることは（意図的かどうかはともかく）省略していることになる。

それではこのような省略は何を意味しているのだろうか。切り取られた部分は現実の社会におけるサイドの好ましからざる行いと、預言者と血のつながりが無い人物がアフル・アル＝バイトに含まれる可能性に関する記述である。それらはどちらもサイドに対して良い感情を持っていない人びとに攻撃の糸口を与えるものであり、二人の著者にとってはわざわざ書く必要がない事柄であろう。

三つの著作の特徴をまとめると以下のようなになる。ビン・ヌーフの著作は預言者一族の範囲や地位に関するさまざまなハディースや学説を併記してインドネシアの社会状況に合わせた議論をするための骨子になっていると言える。書名や著者名を変えて2010年代まで再版されたことがそれを物語っている<sup>56</sup>。その一方ヒンドゥアーンとマシュフルの著作は理念的な預言者一族、つまりムスリム・コミュニティの尊敬を集め、各地のイスラーム化に貢献し、一族の紐帯を維持する人びと、といったイメージを社会にも預言者一族自身にも植えつける、または再認識させることを目的としている。3冊とも共通する出典をもとに「標準的」な議論を展開する部分はあるが、ビン・ヌーフとその他の著者では著作の目的や記述のトーンが相当異なっていることは指摘できる。

## おわりに

### —現代インドネシアの預言者一族—

本稿で分析してきた著作を見ると、現代のインドネシアにおいて預言者一族が置かれている状況が浮かび上がってくる。預言者一族であることがことさら問題となった1900年代から30年代と比較すると、現在では預言者一族の伝統的な地位や特権に対して正面から挑戦するような議論はない。多数の預言者一族が特に自らのアイデンティティについて深く考えることなくインドネシア国民として、また世界的なムスリム・コミュニティの一員として生活している。しかし預言者一族の一部の人びと、特に宗教者やサイドの団

<sup>56</sup> ヒンドゥアーンもマシュフルもビン・ヌーフの著作を引用している。



体の職員から見ると看過できない状況も存在している。それは預言者一族の存在自体を疑う言説があること、預言者一族とシーア派を直接結びつける人々が存在すること、預言者一族の女性と一族外の男性との結婚が現実に広がっていることなどである。その一方、基本的な学識や倫理観に欠けた預言者一族が存在することもビン・ヌーフやフサイニーの文章から浮かび上がってくる。おそらく実社会に暮らしている預言者一族は教育されるべき人びと、つまり一般信徒としての側面が強いのであろう。理念としての預言者一族と社会に暮らしている生身の人間としての預言者一族の差が今後もインドネシアの預言者一族論の主要なテーマの一つとなっていくであろう。